

特集「私たちのちかい」を通して

news

「私たちのちかい」を通して

燃えさかる火のような 貪欲・瞋恚・愚痴の三毒

一、むさぼりいかり、おろかさ流されず
しなやかな心と振る舞いを心がけます
心安らかな仏さまのように

私は機会あるごとに、この第2条を味わいながらお話をさせていただいています。このたびも法話の機会をいただいて、第2条を味わいつつパソコンで原稿を入力し始めました。

ご門主さまが唱和をお勧めくださいます「私たちのちかい」は4カ条からできており、各条の終わりには「仏さまのように」のお言葉があります。仏さまとは、すべての仏教徒がめざす涅槃という状態にある方です。涅槃は、インドの言葉「ニルヴァーナ」の音を漢字に当てたものと伝えられます。ニルヴァーナとは、煩惱の火が吹き消された状態であると言われています。

感謝のお念仏を申して、少しでも

仏さまのお心になうよう努める

ご門主が2016年の伝灯奉告法要初日に、私たち念仏者が現実世界でどのように生きていくべきかを示された「念仏者の生き方」。その肝要を2018年に4カ条にまとめられたのが、「私たちのちかい」です(別掲)。そこで「私たちの

ちかい」に親んでもらうため、2条目の「むさぼり、いかり、おろかさ流されず しなやかな心と振る舞いを心がけます 心安らかな仏さまのように」の味わいを、中央仏教学院の北塔光昇院長に執筆してもらいました。

私たちのちかい

- 一、自分の殻に閉じこもることなく
穏やかな顔と優しい言葉を大切にします
微笑み語りかける仏さまのように
- 一、むさぼり、いかり、おろかさ流されず
しなやかな心と振る舞いを心がけます
心安らかな仏さまのように
- 一、自分だけを大事にすることなく
人と喜びや悲しみを分かち合います
慈悲に満ちみちた仏さまのように
- 一、生かされていることに気づき
日々精一杯つとめます
人びとの救いに尽くす仏さまのように

言われ、これらの火が吹き消された状態が涅槃という心安らかな状態です。ですから、条文の「心安らかな仏さま」とは、涅槃の状態の阿弥陀さまのことです。

煩惱のもと自身に 「くだわる」おろかさ

さて、この三毒の煩惱が細かく分類されて百八の煩惱となっていることが、インドのさまざまな経典や論書で説かれます。例えば、親鸞聖人が『高僧和讃』で、

本師龍樹菩薩は
『智度』・『十住毘婆沙』等
つくりておほく西をほめ
すすめて念仏せしめたり

(註釈版聖典578頁)

と記された『智度』とは、聖人が浄土真宗のみ教を正しく伝えてくださったと尊敬される七高僧の第一祖・龍樹菩薩が著されたところの『大智度論』のことですが、その中に四種の魔についての解説があります。魔とは、仏道修行をさまざまに、人のいのちを奪うものことですが、その一番目に煩惱が挙げられ、次のように書かれています。

煩惱魔とは、いわゆる百八の煩惱等に
して、八万四千のもろもろの煩惱に分
別す

煩惱魔とは、一般に言われる百八の煩惱などであり、より詳細に言えば八万四千にも分けられるというのです。

経典では、百八も八万四千も、数の膨大なことを表します。百八煩惱という言葉は、すべての煩惱を表したものでありましょう。このように百八とか八万四千とか、数えきれないほどある私たちの煩惱ですが、大きく分けると、「むさぼり、いかり、おろかさ」の三種にまとめられます。

それら無数の煩惱の特徴は、自分にくだわることにより、自分に都合のよいものを「むさぼり」、自分に都合のわるいものに「いかり」を持つということです。そして、自分にくだわる「おろかさ」が、煩惱のもととなります。

私たちは誤りを人に指摘されると、それが正しい指摘であっても、不快に感じる時があります。特に、家族のように親しい間柄であれば、その不快な気持ちをそのまま態度に出して、かたくなになることがあります。それは自分にくだわる「おろかさ」から起るものなのです。

私たちはおろかさはかりで、しなやかな心を持つことができません。そして自身に都合な場合は、人の優しさを素直に受け入れることもできません。そのことを、阿弥陀さまは仏のはたらきによって知らせてくださいます。そして、しなやかな心を持ち、しなやかな振る舞いをするを常々心がけられるよう育ててください。

やがては阿弥陀さまのお浄土で本当のしなやかな心をいただける私たちなのです。感謝のお念仏を申して、少しでも心安らかな仏さまのお心になうよう努力し、毎日のおつとめで「私たちのちかい」を唱和させていただきます。



きたづか みつのり
北塔 光昇
中央仏教学院院長
勸学